

新刊紹介

松原好次・山本忠行編著 (2012)  
『言語と貧困—負の連鎖の中で生きる世界の  
言語的マイノリティー—』  
明石書店、265頁

松原好次

本書の執筆者は大部分が大学における言語教育（日本語、英語、スペイン語、アラビア語、フランス語、ドイツ語などの教育）に携わる者である。なかでも英語教育関係者が多い。英語教師は、生業（なりわい）としての英語教育と、そこに内在する思想・イデオロギー上の問題との間に潜む矛盾で悩まざるをえない。折り合いをつけようと努力はするが、その努力は往々にして破綻してしまう。「なぜ破綻してしまうのか」という長い問いかけの中から『言語と貧困』が生みだされたと言えよう。

1980年代に湧き出した反英語帝国主義の論調は、30年後の現在、姿を消してしまっている。国際英語論や異文化コミュニケーション論などという形に吸収されているという実態があるからであろう。たとえ英語教育学のなかで抵抗を試みたとしても、実際には英語帝国主義という大きな渦に巻き込まれてしまう。“英語＝リンガ・フランカ”という幻想が、それほどまでに現実味を帯びてきているからであろうか。

そこで編者が考えたのは、言語教育（学）という縛りから自らを一旦解放して、英語も含めた「大言語」が持つ暴力性を明らかにし、そのような大言語が言語的マイノリティーの苦境とどのように絡み合っているかを解明してみようということであった。要するに、「大言語」の教育に潜む問題は、教育（学）とは別次元の問題（思想・イデオロギーの問題）<sup>1</sup>として扱わない限り、言語帝国主義の餌食になる恐れがあると判断したわけである。

読者のなかには、タイトルにある「言語と貧困」という結びつきに違和感を抱かれる方がいるかもしれない。一般的に「貧困」と言えば、「経済」や「政治」との関わりをなかで論じられることが多いからである。しかし、「言語と貧困」の間には深い結び

つきがあり、いわば悪循環となって負の連鎖を形成している。誕生後、最初に与えられた言語を使用するゆえに、あるいは生まれついた土地における支配的な言語を満足に使用できないゆえに、生活上さまざまな点で不利になり、結果として貧困に陥るということもあり得るからである。そして、貧困なるがゆえに、支配的な言語へのアクセスが断ち切られたり、支配的な言語の選択を余儀なくされたりする。劣勢言語の話し手が優勢言語を全面的に選択した場合でも、貧困ゆえに満足な教育を受けることができず、言語能力を高めることができない。その結果、物質的にも精神的にもさまざまな不利益を被ることになる。

負のスパイラルともいえるべき「言語と貧困」の問題は、国の内外を問わず起こりうることである。しかし、この問題は見過ごされることが多い。なぜならば、貧困には政治、経済、社会、人種、民族、宗教、文化、教育など様々な要因が切り離しがたく絡み合っているため、言語というファクターと直接的に関連する部分のみを抽出することが極めて難しいからである。そこで本書の各章・コラムでは、この問題が世界各地において、どのように発現しているかを具体的に報告したのち、「言語と貧困」という悪循環を断ち切るための解決策を模索する。その際、各々の執筆者は以下の2点について自問しつつ、読者に問題を投げかけることになる。ひとつは、「言語と貧困」という問題の所在そのものが認識されているかどうかという問いかけである。もうひとつは、「言語と貧困」という問題に、支配的な言語、とりわけ英語という大言語が、直接的・間接的に関与している実態を認識できているかどうかという問いかけである。

まず、ひとつ目の問いかけ（問題の所在）について考えてみよう。日本という国に住んでいる限り、母語である日本語で教育を受けることは当然のことにように思える。しかし、世界各地の実態を探ってみると、母語による教育どころでなく、教育を受けることさえできない人々が大勢いることに気づく。たとえ教育を受けることができても、初等教育の前期段階で母語による教育が受けられず、共通教養としてのリテラシー獲得がままならず、負の連鎖に投げ込まれる人々が大勢いるのである。生まれついたときに獲得した言語ゆえに、学校教育で苦勞を強いられ、進学や就職においてはスタートラインに立つことさえ叶わず、貧困ゆえに自らも、子どもたちも重要な情報にアクセスできない。このような問題が世界の各地にあることを、私たちはどの程度知り得ているだろうか。

あるいは、日本で生活する言語的マイノリティの苦境を私たちは自らの問題としてとらえることができているだろうか。1990年代以降、消滅の危機に瀕した言語を救

おうという世界各地の動きがマスメディア等で紹介されるようになったとはいえ、日本の先住民族アイヌが抱える「言語と貧困」の切り離し難い関係については認識が深まっていないのではあるまいか。その他の言語的マイノリティについては、この問題の所在すら認識されていないと言っても過言ではないだろう。たとえば、琉球諸語（しまくとぅば）の置かれてきた苦境が「貧困そのもの」であるということに気づいている人は多くないだろう。ヤマトンチュ（本土の人）による侵略によって琉球諸語話者は政治的・経済的困窮を強いられただけではなく、自らの言語を奪われた。その結果、琉球弧で育まれた言語に内在する文化の豊かさが奪われ、蔑ろにされている。「言語と貧困」に関わるその実態に多くの人々が気づくことこそ、次のステップ（再活性化運動）に進むための前提条件になるのではあるまいか。

次に、ふたつ目の問いかけ（支配的な言語、とりわけ英語の関与）について考えてみよう。本書は、英語を唯一の指標とするのではなく、可能な限り世界各地の複雑な言語事情をすくい取ってテーマに迫ろうとしている。しかし、想定外のところに英語が影を落としていることに驚かざるをえない。たとえば、ガリシア語（スペインの少数民族言語）の再活性化運動を進めるより、学校教育では英語を重視すべきだという住民の声が大きくなっているという報告（第2章）に接するとき、英語という大言語が世界の様々な地域にまで浸透している現実には気づかざるをえない。

ところが、「英語という“大言語”による一元化が持つ非倫理性・不平等性・非相互性を直視しない精神風土」<sup>2</sup>のなかで暮らす私たちは、「言語と貧困」という問題に英語が関与しているとは考えないのではあるまいか。むしろ、英語という優勢言語を身につけることこそ豊かさを獲得するための唯一の方法だと思い込んでいる人が多いかもしれない。その思い込みは、ある意味で自己防御システムの発露なのかもしれない。つまり、英語という言語を修得して社会階層の上部に昇ってきた人々は、その既得権益をわが子に引き継がせようとする。その結果、格差が固定化して、社会の流動性が失われることになる。まさに、この固定化というプロセスに言語が深く関わっているのである（例えばシンガポールの言語事情を追う第6章参照）。

初等教育段階で、子どもたちの母語でなく英語を教育言語として用いるため、共通教養としてのリテラシーが獲得できず多くの人々が貧困に陥るというガーナの報告（第5章）に接するとき、英語の一極集中あるいは英語支配の浸透ぶりに私たちはどの程度、気づいているのだろうかと自問せざるをえない。さらに言うならば、母語による基礎教育の重要性を認識した政権が教育政策を打ち出したとしても、政策の転換

や政権の交替によって言語政策が揺らぐため、国民の言語能力向上、ひいては教育の向上に結びついていない国々があるという現実には私たちは気づいているだろうか。

さて、貧困を「基本的な潜在能力を奪われた状態」<sup>3</sup>と定義するならば、世界のさまざまな地域で顕在化している貧困が日本の現状と全く無縁な問題であるとは言えない。また、現代社会で生き抜いていくために必要な基本能力の育成が言語を通して行なわれるという実態に着目するとき、「言語と貧困」の関係を個人や家族の問題として片付けることもできない。国民の間の経済的格差が年々拡大し、「ワーキング・プア」「ネットカフェ難民」「社会的排除」「子どもの相対貧困率」などといった言葉が取り沙汰される昨今、社会問題として「言語と貧困」の関わりを解きほぐす必要がある。さらに、グローバル化の進展に伴い、国際競争力の向上が求められている現在、個人・企業・教育機関・地方自治体・国家いずれのレベルにおいても、言語観の確立あるいは言語政策の確立が求められている。

上記のような状況において本書が目指すのは、「言語と貧困」という座標軸を設定することによって、「貧困」という社会事象に「言語」が密接に関わっている実態をあぶり出すことである。言い換えれば、「言語と貧困」という負の連鎖が、世界各地や日本において、多くの人々から生活の豊かさを奪い取り、社会格差の再生産・固定化につながっているという事実を描くことである。あるいは、「貧困」という事象に焦点を当てることによって、人間の生活の豊かさを陰で支えているものが「言語」であるという事実に注意喚起することこそ、本書の真のねらいであると言える。

本書は、以下に示すとおり3部構成になっている。

第1部は、主として先住民族の言語（ウェールズ語、ハワイ語、マオリ語、ベルベル語、ガリシア語など）を取りあげ、言語的マイノリティが貧困に陥り、「言語と貧困」という負の連鎖のなかで苦しんでいる実態を描写する。それと同時に、少数言語の再活性化を後押しする最近の動きにも言及する。

第2部は、「西欧語による豊かさの追求」という枠組みで、英語圏・フランス語圏アフリカ（ガーナ、セネガル）およびアジア各国（シンガポール、ブータン、韓国など）における「言語と貧困」の絡み合いを詳らかにする。個人単位あるいは国家単位で、西欧語とりわけ英語・フランス語という優勢言語に夢を託し「豊かさ」を追求しようとする流れは、押しとどめることのできないところまで来ているように思える。しかし、「豊かさ」を求めているはずの個人や国家から、呻き声とも言うべき軋みが聞こえ

てくるのはなぜなのかと各章・コラムの執筆者は問う。

第3部は、各地の移民が直面している様々な問題のうち「言語と貧困」に関する問題を取りあげる。「豊かさ」や「幸福」を求め移住していった新天地で、辛酸をなめる移民が多い。その根底に言語問題が潜んでいることを、日本・米国・ドイツ・ベルギーの事例をとおして検証する。

#### 注

- 1 大石俊一（2005）『英語帝国主義に抗する理念—「思想」論としての「英語」論』明石書店
- 2 中村敬（2000）「船橋洋一、志賀直哉そして森有禮—西洋の大言語と皇国言語の狭間で」『成城大学文芸学部紀要 170：1-32』
- 3 アマルティア・セン、石塚雅彦訳（2000）『自由と経済開発』日本経済新聞社

\*この新刊紹介文は、編著者の一人（松原）によって書かれているため、本書冒頭部「はじめに」の一部と重複していることをお許し願いたい。

（電気通信大学）